「愛國」と「文藝」のはざまで

——聞一多と清華圏の詩人たち——

鄧　捷

一、はじめに

二十年代初期、中國詩壇に「小詩」、「哲理詩」が流行していた。西洋からの多大な影響を受けて生まれた新詩の中でも小詩、哲理詩は例外で、その源は日本の俳句や短歌、あるいはインドのタゴールにあった。一九一三年に詩集『ギーターンジャリ』などをもって、ノーベル文學賞を受賞したインドの詩人であり、思想家であるタゴールが、「講學社」を通じた徐志摩などの招きで中國を訪れたのは一九二四年春のことである。

中國文藝界は一時歡迎ムードに包まれ、新聞、雜誌は爭ってその來華のニュースを報道し、『小說月報』は三號にも渡ってタゴール特集を組んだ。鄭振鐸のようにタゴールの翻譯紹介を通して自らの文學を確立していく青年が登場する一方、[1]このタゴールブームには「不滅の人格」[2]をたたえて「偶像崇拜的な衝動」[3]に驅られた過熱な一面もあった。その異常とも言える歡迎ぶりには異論を唱える人々もいた。たとえばタゴールの世界平和唱導は有產階級の護身符に過ぎなく、無產階級にとって鐵の鎖以外のなにものでもないと、階級論から批判したのは郭沫若であった。[4]また、當時アメリカ留學中の聞一多も遙かコロラドより『時事新報』副刊『文學』に「泰果尔批評」の一文を寄せた。知惠を重んずるタゴールの「哲理詩」は、情緒を重んずる詩の本來のあるべき姿を主客轉倒させたものであり、「哲理詩」が代表するタゴール文學の最も大きな缺陷は、現實を捉えていないことで、彼が歌う「少女」、「新婦」、「老人」などは、現實の人生を生きる人間ではなく、神の象徵に過ぎない。タゴールの文學は必ず失敗する。なぜなら、文學の宮殿は、必ず現實人生の土臺の上に建てるべきものだからである。タゴールの詩の藝術性について、その形式の無さを否定し、もともと形式に乏しい中國の新詩は決してその影響を受けてはならない、と聞一多は述べている。

詩の美を內容に見合った形式にあると捉えるのは聞一多の一貫した主張ではあったが、一九二二年、詩の「人を感動させ善に導く」役割と通俗明白な「民衆化」を說く兪平伯の「詩底進化的還元論」を批判する「『冬夜』評論」においては、すでに「藝術のための藝術」への傾倒、唯美的な文學觀を色濃く見せていた。その聞一多がなぜ一年後にはタゴールに對してこれほど文學の現實性を强調したのであろう。

「泰果尔批評」は一九二三年一二月に發表された。それはアメリカ留學中の清華學校の學生グループが「國家主義」（ナショナリズムの

譯語）を提唱する「大江學會」を組織した半年後であり、また「大江會」發足の半年前でもあった。[5] 聞一多が「大江會」主要メンバーであり、「國家主義者」であることはすでによく知られている。また、その唯美的な藝術觀とナショナリズム思想との矛盾もしばしば指摘されてきたことである。しかし、實際聞一多はむしろその兩者の共存を意識的に求めてもいたのであり、[6] そういった意味で、これまでその兩者が聞一多自身の中でどのような形で矛盾・共存していたかに關して明らかにされたことはなかった。「泰果尓批評」の背後に隱れた眞意とはなにか、また、一九二五年の歸國後も「國家主義」活動を續けた聞一多は、「三一八」記念特集を以て創刊した『晨報・詩鐫』にいかなる期待を託していたのだろうか。本稿では、聞一多とその周邊の詩人たちの、國家という重みを自ら背負いながら、本格的な近代文學を模索する姿を浮き彫りにしたい。

二、「大江會」と清華學校

一九二四年夏、聞一多、梁實秋、羅隆基、何浩若ら清華學校からの留學生十數人がシカゴ大學近くにある小さな旅館（Drexel Hotel）に集まり、壁一面に飾った大きな中華民國の國旗の前で、「大江的國家主義を信仰」する宣誓を行い「大江會」を發足させた。[7] 「大江會」の中でも聞一多はとりわけ文化活動に熱中し、「中華文化的國家主義」提唱のもとアメリカで中國劇を上演し「國劇運動」を試みようとした。一九二五年七月、「大江會」機關誌『大江季刊』は上海泰東書局により發行され、第一卷第二期に「宣言」、「章程」、「細則」とともに、「會員一覽表」を掲げている。それによれば、結成當時のメンバーは全部で二九人、全員清華學生であった。[8] 「大江會宣言」は一九二五年十月九日、十月十六日、十月二三日の『清華週刊』（二四卷五～七號）に連載され、學生の間で國家主義に關する論爭を卷き起こした。[9] 張蔭麟「論最近清華校風之改變」（『清華週刊』一九二五年九月二五日）は一年來の清華における氣風の最も重大で喜ばしい變化について、國家主義運動と反キリスト教運動を擧げている。

「大江會」が清華學生の間で生まれ、また、國家主義が清華學校で大きな反響を呼んだ原因については、主に二點を指摘できよう。一つは清華における根强いキリスト教の影響、もう一つは學校側や學生の「國學」輕視である。

北京西北郊外の圓明園東南方にある現在の清華大學は、一九二八年大學に改編されるまでは「清華學校」と呼ばれていた。それは、アメリカが義和團事件のために得た庚子賠償金の過大請求部分を清國政府に返還したお金を資金源として作られたアメリカ留學豫備校である。清華の設立の主な目的は、それまでの日本留學の流れをアメリカに導き、「知識と精神面から中國の指導者を支配する」[10] ためであったとも言えよう。

清華はミッション・スクールではなかったものの、賠償金返還と留學生派遣にめぐっては宣教師アーサ・スミス（一八四五～一九三二）などが當時の大統領T・ルーズベルト（一八五八～一九一九）に多大な影響を與えていた。[11] また、創立初期からミッション系の上海聖ジョーンズ大學と密接な關係を持ち、理事會のメンバーから學長、副學長、中國人英語教師まで、ほとんどの人が同大學卒、或いは同大と何らかの關わりを持つもので占められていた。[12] 初期のアメリカ人教師も、大體北米キリスト教青年協會を通じて應募してきた人々で、全員クリスチャンであった。清華の最初にして且つ最大の學生團體は「キリスト

教青年會」であり、その會員はおよそ學生數の半分を占めて、[13] 旺盛な活動を展開し、聞一多を含めた多くの學生が洗禮を受けたのである。上から下まで濃厚なキリスト教雰圍氣を持つ清華が北部中國のキリスト教大會の恰好な開催地となる。

一九二二年四月に世界キリスト教學生同盟の會議が清華で開催されたが、これを發端に、北京、上海のみならず、中國各地で大規模な反キリスト教運動が起きていた。反キリスト運動は新文化運動の影響、ナショナリズムの風潮及び共産主義との關連といった複雜な要素を持っていると、山本澄子氏が指摘している。一九二二年三月、教育はすべての宗派から、また政黨から離すべきであると主張する蔡元培の「教育獨立義」をはじめに、反キリスト運動は教育權回收問題と絡みあいながら推進されていく。[14] この時、アメリカ留學豫備校の清華は教會學校とともに輿論の非難の的となった。一九二五年、キリスト教華北各校のクリスチャン代表大會がまたも清華で開催された時、キャンパス中には「清華學生非キリスト教同盟宣言」が貼られていた。一九二五年後半から『清華週刊』では、清華が教會學校ではないという辯明、清華の「青年會」活動、キリスト教をめぐる議論などが紙面を大きく占めるようになった。「大江會」も「大江會宣言」において「帝國侵略主義」の文化侵略としての教會教育を猛烈に批判している。[15]

その一方、清華は「西學」と「國學」の矛盾という宿命的な問題も抱えていた。清華の學制は中等科四年（入學可能な年齢は一二～一五歳）と高等科四年（入學可能な年齢は十六～二〇歳）の計八年に定められている。履修科目は「西學部」と「國學部」に分けられ、「西學部」は英語教育と英語による基本教育を實施、すべての科目が卒業に必要な單位の取得に有効である。「國學部」は國文、中國歷史、地理などの科目を設けているものの、その成績は單位にならない。「國學部」と「西學部」の格差を、一九一六～一七年高等科の履修科目を例にして見よう。修身、講文、文學史、倫理學史、作文、閱讀の六科目を開く「國學部」[16] に對し、「西學部」は英文と他の外國語、社會科學、自然科學、數學、技術科學などの類別において二四科目を開いていた。[17] 臺灣の研究者蘇雲峰の論文「清華的人文教育傳統」に據れば、「西學部」の必修科目の中で、言語科目類は最も重い比重を示している。必修單位は合計四七であるが、社會科學四、自然科學四、數學六、技術一に對して、言語類（英語と第二外國語）は、なんと三二單位、全體の六八・一％を占めている。[18] 留學豫備校の必然的な特徴と言えるかもしれないが、清華の學生は、何よりも優先して外國語の勉强に多くの時間を要求されたのである。

「西學部」の成績が合格でなければ卒業、留學に影響を來たすので、學生たちも自ら「西學」の勉强に勵む。「西學部」と「國學部」の課外讀書の實態について、一九二四年六月『清華週刊』の「清華學生國學調査」アンケートは次のような結果を示している。

> 清華學生を平均すると、毎日、課外の英語讀書時間（英語授業の豫習が含む）を少なくとも三時間は持っている。しかし、課外で毎日一時間を中國書を讀むのに費す人は、今回のアンケートによれば二〇五人中、僅か一一人にすぎない。

このような、少年たちが「長衫」をまとい英語を操る清華園では、中國の傳統文化はいかなる境遇にあったのか。たとえば、このような授業風景がある。

> 先生は教壇で「人黃花より瘦せたり」を說く。すると學生は下から「人は黃花より瘦せているのか？」と問い掛ける。先生曰く「これはた

だ心でさとることができるだけで、言葉で傳えることができない。」學生も言う、「心でさとれば良いのなら、あなたがここにいる必要はどこにあるの？」更にある學生は「人黃花より瘦せたり」に對句をつなげる――「豚白薯の如く肥えたり」[19]。

當時の「國學部」の先生は清華園の最も不遇な人たちであった。彼らは「西學部」の教師陣と比べて、人數が少ないだけでなく、アメリカ人教師や中國人英語教師と比べて、給料は數分の一、住まいも劣惡であった[20]。しかも、ほとんど年輩の科學の經驗者であり、「學人」「進士」の人もいた。その教育方法は陳腐で、統一した教科書さえなかった。おまけに南方出身者が多く、ほとんどが北京語を上手に話せない[21]。幼い少年たちの目には、「國學」は落ちぶれた教師陣の失意の姿に重ねて映っていたことであろう。中國傳統文化は「國學部」の「老先生」たちとともに、清華園の道化者となっていたのである。

このような授業風景を裏付けるデータがある。前に言及した二四年の「清華學生國學調査」の中に「授業中の狀況調査」という項目があり、調査結果は以下の通りである。

（表を參照）

回答者は二〇五人ではあるが、一人が複數の回答をしている場合もあるので（時には講義を聞き、時には雜事をするケース）、各項目の人數を足せばその數が四一一人になる。その點を考慮に入れると、「集中して講義を聽く」學生四三％という數値は實際には全體の約二〇％に過ぎない。しかし、面白いことに、最も人數多いのは「課外中國書を讀む」學生で、一二〇人、五九％であり、即ち實際の三〇％近くを占めている。國學課目に對して學生は無關心である一方、授業を無視しながらも個人で中國書を讀む學生も多くいたのだ。一九二四年まで幾

國學授業の狀況調査

學　年	回答人數	集中して講義を聽く	課外中國書を讀む	英語書を讀む	手紙書きなどの雜事をやる	お喋り、惡戯、居眠りなど	よく遲刻する
大一	24	10(41％)	7	8	9	4	0
高三	36	23(67％)	18	9	5	3	3
高二	41	18(44％)	31	16	13	10(25％)	7
高一	30	15(55％)	19	11	11	5	9
中四	43	6(14％)	28(65％)	20(50％)	24(55％)	5(12％)	9
中三	31	17(55％)	17	7	18	7	1
總人數	205	89	120	71	74	34	29
	(100％)	43％	59％	34％	31％	19％	14％

『清華週刊』國學問題專號　318期
「清華學生國學調査」

度もの國學教育の改正が重ねられたにもかかわらず、「國學部」の授業は學生の興味を引出せていないという點が浮き彫りにされている。

一九一四年三月、清華の最初の定期刊行物『清華週刊』が創刊され、清華學生の論壇となっていく。二五年「國學院」、大學部設立まで、國學問題は『清華週刊』が大きく取り上げた十大問題の一つとなる[22]。一四年十月、「振興國學與吾輩之責任」（陳達）、一五年三月「對於國學之悲觀及其救濟法」（鈞）、一六年五月「論振興國學」（多）が次々と發表され、清華園の國學輕視を批判し、中國に對して持つべき學生の責任を問いかけている。一七年夏、第二回庚子賠償留學生、アメリカ歸りの胡適が清華で文學改良問題を題にして講演を行うと、國學問題は白話問題と絡んでその波紋が一層廣がった。一九一八～二〇年には、國學に關する學生や教師の發言が『清華週刊』に多く見られる。學生からは、「國文與科學」

（基　一四四期）、「中西學術宜兼通不宜偏重」（攸　一五三期）、「清華國文教授改良之商榷」（基　一六二期）、「吾校國文爲何而敗壞」（趙錫麟　一八四期）、「改良中文芻議」（梁朝威　一八六期）、「我之中文學科改良意見」（胡竟銘　一八六期）などのさまざまな意見が發表され、教師からも、「我對於國學改良之意見」（汪鞏菴　一八六期）、「白話問題之商榷」（楊喆　一八六期）という文章が發表されていた。二四年三月、『清華週刊・十周年記念增刊』が發行され、その中で「清華國學問題」（李惟果）という長文は、一一年清華成立以來の「國學部」の授業科目の變更、學校と學生の國學改革にめぐる政策と言論を詳しく檢討し、東西文化の交流、融合を呼びかけている。同年六月、國學問題特集『清華週刊・國學問題專號』（三一八期）が發行され、すでに言及した「清華學生國學調査」の結果が公表される。「科學的な方法」で清華の國學實態を明らかにし、効果的な改革を試みようとする學生の意欲がはっきり見て取れよう。

筆者の名前には多（聞一多）、基（羅隆基）があり、二人は後の「大江會」の中心人物になっていくのである。國家主義を唱える「大江會」はアメリカで成立されたものの、その中國への強い關心は傳統文化の空白が最も際立ちそのことへの危機感が高まっていた清華キャンパスに芽生えたのだといえよう。清華在校十年の聞一多と、それを中心とした清華文學社の文學經歷もそれを裏付けているのである。

三、聞一多と清華文學社

一九一六年、弱冠一七歳の聞一多は「論振興國學」（『清華週刊』第七七期）を發表し、「新學が盛んになるにつれ古學が衰え、古學が衰えるにつれ國勢が危險になりつつある」[23]という危機感を現わしていた。また、二一年の「中文課堂底秩序底一斑」（『清華週刊』第二一四期）においても、「英語の授業は誠實さや人格を重んじるが、中文の授業になると騙したりごまかしたりして、嵌めをはずしほしいままに振る舞い、その醜態惡聲は芝居小屋、茶館、賭博場にも劣る」と清華學生を烈しく批判している。聞一多は、一九二〇年九月『清華週刊』に新詩「西岸」をはじめて發表して以後、舊詩を發表することはなかったが[24]、傳統文化に對するまなざしには變りがなかった。アメリカ留學の半年前に、「律詩底研究」を書き上げ、中國の律詩は、西洋のソネット（十四行體）に匹敵する「純粹な中國藝術の代表」であり、「一首一首の律詩の中に一人一人の中國式人格がある」と分析し、當時絶大な反響を呼んだ郭沫若の『女神』に對して嚴しい意見を示し、「郭君［の詩…引用者注、以下同樣］は西洋人の中國語であるにすぎない。知らねば翻譯かと疑われるやも知れぬ」と、『女神』を含めた、「中國藝術の原質」を失った當時の新詩の「歐化底狂癖」（『女神』之地方色彩）を批判した。

歐化に走る時代に敢えて「中國人の人格」「中國藝術の原質」を語るのは、清華の國學荒廢の現狀に對する深い反省によるものである一方、第一次世界大戰後、西歐科學文化に懷疑の聲をあげる「文化保守主義」思潮の影響も指摘できよう。一九二〇年三月に、歐遊から歸國した梁啓超は、『晨報』（第七版、三月六日～八月一七日）に「歐遊心影錄」を連載して自らの體驗に基づき、戰後西歐の慘澹たる狀況と、西歐人の中國文化に對する贊美と期待を紹介、「孔老墨三位大聖」と「東方文明」を以って西洋文明を救うことを中國青年たちに呼びかけている。その後、アメリカのデューイ、イギリスのラッセルなどが前後して中國を訪れ、西洋文化を批判し東方文明に贊辭を送り、中國と西洋

文化の交流、融合を説いた。二一年、梁漱溟は『東西文化及其哲學』を出版し、文化的根源から人生哲學まで「五四新文化運動」を全面的に清算し、中國文化と孔子思想を吹聽した。口語文で書かれたこの本は、單なる復古主義とは異なって大きな社會的反響を呼び、一年以内に版を五回も重ねる空前の賣行きぶりを誇った。[25]「律詩底研究」の最後に添えた參考書目にも『東西文化及其哲學』が竝べられている。

このような背景下、聞一多のもとに清華文學社が成立したのは一九二一年一一月二〇日のことであった。『聞一多年譜長編』（一九九四、湖北人民出版社）によれば、文學社の前身は一九二三級の梁實秋、顧毓琇ら七人で二〇年一二月に成立した「小說研究社」であり、二一年、聞一多の提案でそれを詩、小說、戲劇を包括した「清華文學社」に改組したのである。幹事、書記はそれぞれ梁實秋、聞一多であり、聞一多は一番年長で、「老大哥」と呼ばれ、大きな影響力をもっていた。清華文學社は主に學生を中心としてキャンパス内で活動する團體で、自らの雜誌を持たなかったので、その具體的な活動や文學傾向は突き止めにくいところがあるが、前掲『年譜』にある彼らの活動に關する斷續的な記述を頼りに、少なくても二つの特徴を指摘できると思う。

一九二二年七月、聞一多はアメリカに渡る。梁實秋は「みんなは頼みの綱を失ったように感じていた」[26]文學社の社友を代表して詩「送一多遊美」を作り次のように歌う。

……東方の魂よ！／鷹揚溫厚な東方の魂よ！／もしも、白檀の香爐の上に漂う煙りの中にいないなら／祈りを捧げる人々は、跪いて何を拜んでいるのだろう。

……東方の魂よ！／とうとう、絲の切れた凧のように／遙か遠い雲の彼方に飛んで行ってしまったのか？／ああ！詩人は早くもその絲の端をつかみ／雲の上に立って喜び降りている／雲の切れ目に現われる光景は／踊り跳ねる髑髏の群れ、さまよう屍たちで／この世はびっしりと埋め盡くされているのだ／すると詩人の心が震えた／「持っていきなさい——これはあなたの魂だよ！」／この一言で全き詩人となる。……[27]

立ち上がる香爐の煙から姿を消し、絲の切れた凧のような「東方の魂」、詩人は遙かなる雲の上でその絲を手に入れる。だがそこから眺めたこの世は、魂を失った生けるしかばねに滿ちている。心を震わせた詩人が言った、「持っていきなさい——これはあなたの魂だよ」。この一言で眞の詩人を完成させることができると、梁實秋は歌っている。やや難解な詩であるが、梁實秋が詩序で聞一多を「現在清華の唯一の詩人」と呼んでいることから、ここでの「詩人」とは聞一多のことを指していると考えて差し支えないだろう。また、當時書かれた二人の他の文章もふまえて考えるならば、魂を失った「この世」がアメリカの影響下におかれた清華園のことを意味していることも間違いない。

清華を去る直前に、母校に贈る「餞別の言葉」として聞一多は「美國化的清華」（『清華週刊』二二年五月一二日）を發表、清華におけるアメリカ物質主義の影響を痛烈に批判して東方文明に戻れと呼びかけていた。梁實秋もこれに應援する形で、次期の『清華週刊』において、これからアメリカの大學で經濟、實業などを專攻する多くの清華學生に「美國機器」ではなく「東方的人」になれと、語っていた。[28]詩の中で繰り返して歌われる「東方の魂」は當時の文學社の間に高まっていた一つの氣運を代表する言葉であろう。アメリカニズム影響下の清華のような、魂を失った「人間界」の人々に「東方の魂」を取り戻すことを、互いの信念として勵まし合っているのだ。

一九二二年一一月一日、聞一多、梁實秋共著の『冬夜草兒評論』が清華文學社叢書の第一册として出版された。これはいままで文學活動が清華園という小空間に限られてきた清華文學社が初めて文壇にその主張を明らかにすることを意味している。

『冬夜』と『草兒』は、それぞれ新詩詩人兪平伯、康白情の詩集で、二二年上海亞東圖書館によって出版され、初期の新詩詩壇を代表する。兪平伯は、『冬夜』出版の二ヶ月前に「詩底進化的還元論」という詩論を發表、詩の「人を感動させ善に導く」（「感人向善」）役割、と通俗明白な「民衆化」を說き、「平民性」は詩の本來の主な素質であり、貴族的な色彩は後から加えられたものに過ぎぬとし、進化的な「還淳反樸」を主張する。『冬夜』は彼の主張を忠實に反映した詩集で、飾らぬ描寫と下層民衆を好んで描く點が特徵である。康白情も中國新詩詩壇の先驅者の一人で、『草兒』は一九一九～二〇年の一一七首新詩を集めた代表詩集である。素朴で自然な描寫を特徵とする一方、詩の中には議論や敎訓めいた言葉も好んで取り入れられていた。

『冬夜草兒評論』は、主に兪平伯の「人を感動させ善に導く」及び「民衆化」の主張を具體的な作品に基づいて批判するものである。『冬夜』のいい加減な音節、貧弱な想像と二流の感傷［『冬夜』の人本主義を指す］は、すべて「民衆化」の主張に由來し、「詩は詩人が作るものである。ちょうど鐵は鍛冶屋が打つもの、駕籠は駕籠かきが擔ぐものであると同じように」、民衆の語り口を以って藝術活動としての詩を作るわけにはいかないと、聞一多は指摘している。梁實秋は『草兒』の敎訓めいた口ぶりを批判し、詩の目的が理性より抒情にあり、感情も全てが詩に相應しいとは限らず、善惡ではなく、藝術の美を標準として感情を濾過しなければならない、「詩の境地が卽ち仙人の境地」であり、詩人の思想や詩が現實を超えるものであると述べている。[29]

『冬夜草兒評論』の出版はたちまち贊否兩論の反響を呼んだ。兪平伯は文學研究會のメンバーであり、「詩底進化的還元論」は同研究會下の雜誌『詩』の創刊號に發表したもので、文學研究會の「人生のための藝術」主張を代表する詩論だといえよう。文學研究會側から鄭振鐸などの批判があった一方、[30]日本留學中の郭沫若は梁實秋に手紙を送り、「眞っ暗な夜に二つの明星に出會い、蒸し暑い炎天に二杯の冷たい水を飲んだかのように、…海外で兩君の評論を讀むと、まるで飢饉から逃れた者が、人の足音を聞いたかのようである」[31]と絶贊した。詩の功利性批判、想像、感情、藝術性の强調といった聞、梁の主張は「藝術のための藝術」を信奉する創造社に近いものだった。聞、梁はともに郭沫若に心が傾いていた。『冬夜草兒評論』に對する郭の評價を知った聞一多は「狂ったように喜んだ」（聞一多書信、二二年一二月二六日梁實秋宛）。梁實秋も二二年五月に發表した「讀『詩底進化的還元論』」（『晨報附刊』二二年五月二七～二九日）において、「貴族の文學」「藝術のための藝術」を主張すると、明言している。

「東方の魂」と「藝術のための藝術」、兩者は波瀾に富む近代中國でいかに結ばれることだろうか。二二年一一月から二三年一月まで、聞一多はシカゴから『清華週刊・文藝增刊』第一、二、三期に濃厚な中國的色彩を持つ言葉で愛國感情を歌った「太陽吟」、「寄懷實秋」、「玄思」、「憶菊」、「火柴」、「晴朝」を寄せた。二月、梁實秋は詩評「評一多的詩六首」（『清華週刊・文藝增刊』第四期）を書き、聞一多を「東方詩人」と稱し、「彼が祖國を愛するのは、祖國が祖國であるため（これは一般の人が鄉土を離れ祖國を思う理由だ）ではなく、祖國には『卓越した歷史があり、上品風雅な風格』があり、祖國の文化が『四千年中

華民族の名花』であるからだ」と述べた。

四、梁實秋の詩人像――「風と琴」

冒頭で言及した「泰果尓批評」は『冬夜草兒評論』の一年後に書かれたものである。前述したように、それは「大江學會」を組織した半年後、「大江會」發足の半年前のことであった。この年の夏、聞一多はシカゴ美術學院から後輩で親友である梁實秋の留學先コロラド大學に轉校し、梁と同じアパートで共同生活を始めた。「泰果尓批評」執筆の背後には、おそらく梁實秋との切磋琢磨もあっただろうと考えられる。

タゴールに對する批判は、聞一多に限らず、清華文學社、「大江會」同人の間に共通している。タゴールを招き、到着から歸國までの三ヶ月、上海から北京、太原、日本、香港まで付き添い、自ら「哲理詩」を模倣していた徐志摩には、清華圈の詩人から「詩哲」という皮肉っぽい稱號が與えられている。[32] また、アメリカで「文化的國家主義」の提唱に計畫された文藝誌『河圖』[33]や「大江會」の機關誌『大江季刊』は、ともにタゴールをあえて取り上げず、代わりに「インドのナイチンゲール」と稱され、インド獨立運動のために戰う女流詩人ナーイドゥ夫人（Mrs. Naidu）をたたえる。たとえば、『大江季刊』の創刊號に梁實秋は「詩人與國家主義」の一文を載せ、次のようにタゴールを批評している。

> 詩人の感情はもともと靜かな琴のようで、樣々な風がそれに吹きつける時、自然に樣々な音の波紋を作リ出すのだ。琴が完璧にして無缺である限り、風が吹いてきさえすれば音を出すのだ。であるから、いかなるメロディーを出そうともみな良い詩である。詩人が戀人に贈る詩も、神を贊美する詩も、自然を樂しむ詩も、愛國をたたえる詩も、世界平和を宣揚する詩も、みな詩である――これらに上下眞僞の區別はない。それゆえに、詩人が愛國を歌うのは、極めて自然で合理的なことである。その詩人の環境が彼を愛國的たらざるをえぬよう至らしめる場合には。誰が風に吹かれる琴の響きを抑えることができるのか。……（中略）ここでインドのタゴールに對し我々は驚きを表明せざるをえない。タゴールの人格と詩才はさておき、彼がインドの亡國にもかかわらず世界連合を高く歌うことができるのは、突然嵐が起こり琴に激しく吹きつけたというのに、平和で穏やかなメロディーを奏で始めたかのようで、誠に驚くべき奇怪なことだといわざるをえない。

イギリス統治下で愛と同情の心をもって世界平和を唱えるタゴールは、國家主義者梁實秋にとっては人情を缺いた「超人」であった。梁實秋の「風と琴」の詩人像とはタゴール文學に對する「現實を捉えていない」という本論文冒頭で觸れた聞自身の「泰果尓批評」の一つの脚注として見て良いだろう。それは清華時代から中國への强い思いを抱いてきた國家主義者としての聞一多がインドの亡國の現實を見つめていないタゴールを批判したものだともいえよう。一方、詩人の愛國主義という主張を作品において實踐したのは聞一多だった。彼は多くの愛國詩――「長城下之哀歌」、「我是中國人」、「浣衣曲」［後の『死水』に收錄される「洗衣歌」の原型］、「七子之歌」、「南海之神」を『大江季刊』に發表している。

面白いことに、「詩人與國家主義」においてイギリス文學史上の樣々な詩人を例にして詩人の愛國感情の正當性を强調する梁實秋は、文末でわざわざ次のように斷っている。

> 詩の價値の平衡はそれ自身の藝術美にある。だから私は相變わらず

「藝術のための藝術」という主張を信奉している。私が愛國詩を論じるときには、詩の中の愛國思想を論じているのであり、詩の優劣に全く關係がない。

清華在學中の「東方の魂」と「藝術のための藝術」という二つの價値觀は、ここに來ても相變わらず交わすことなく平行線を辿っているといえよう。しかし、愛國のゆえに文學の藝術性を損ねかねないかという梁實秋の懸念も、多少はここから窺うことができるであろう。愛國と文學、兩者は果たして矛盾なく共存できるのか？これは聞一多にとっても一つの大きなテーマであった。

五、『晨報・詩鐫』の創刊
――「三一八」記念特集として

『晨報・詩鐫』の創刊（二六年四月）は新格律詩の成立を意味している。それは偶然にも「三一八血案」の直後だった。しかし、この偶然の一致は聞一多らにとって極めて重要な意味を持っていた。

五年留學の豫定を二年早く切り上げ、二五年六月に歸國した聞一多は、國家主義者として「北京國家主義各團體連合會」[34]の活動に積極的に參加すると同時に、清華の若い詩人たち、「清華四子」と呼ばれる朱湘（子沅）、饒孟侃（子離）、孫大雨（子潛）、楊世恩（子惠）と親しく交友し、聞一多の自宅で詩の朗讀を行い、詩の形式や格律の問題を檢討していた。「三一八」當日、聞一多は國家主義者として李大釗ら共產黨による天安門集會への參加は控えたものの、[35]四七人が死亡、二〇〇人が負傷した大慘事を目にして、大きなショックを受けたに違いない。二五、二七日、聞一多は「三一八」死者を記念する詩「唁詞――紀念三月十八日的慘劇」と「天安門」をそれぞれ『國魂週刊』と『晨報・副刊』に發表した。四月一日、『晨報・詩鐫』が創刊され、創刊號は「三一八」記念特集となり、徐志摩の發刊詞「詩刊弁言」と朱湘の評論「評『嘗試集』」を除き、聞一多の文「文藝與愛國――紀念三月十八」、詩「欺負着了」を含め、掲載された詩作は全て「三一八」記念に關するものだった。

「三一八」慘事の直後に『詩鐫』が誕生したという偶然の一致は、三篇の記念詩と一篇の記念文を書いた國家主義者聞一多にとって、偶然以上の意味を持っていた。「文藝與愛國――紀念三月十八」において彼はアイルランドと中國を比較して、「愛國」と「文藝」が一體化したアイルランド文藝復興運動の成功に對し、中國の愛國運動と新文化運動は同時に發生したものの互いに「手を携えていない」ために、兩者とも良い成績を上げていないと述べている。

> アイルランドの前例と我々自身の事實はすでに我々に以下のことを告げている：この二つの運動が一緒になれば互いに有益な効果を收めることができ、分離すれば必ず共倒れになる。だから鐵獅子胡同の大流血後に『詩鐫』が誕生したことは、もともと偶然ではあるが、皆さんがこれを偶然としないよう、私は希望する。

「大江會」、「北京國家主義各團體連合會」の様々な政治活動に積極に參加しながら、「中華文化的國家主義」「國劇運動」を精力的に試みようとしてきた聞一多は、「愛國」と「文藝」が一體になったものを求め續けていたと言えよう。彼が批判した胡適、兪平伯による詩の「民衆化」の主張、『女神』の歐化、タゴールの「哲理詩」は、みな「文藝」と「愛國」が分離したものと見なされてきた。「三一八」と『詩鐫』の誕生を偶然としないよう希望する彼にとって、これから『詩鐫』を通して展開していく「新格律詩」運動は、アイルランド文藝復

興運動のように、中國の眞の國民文學復興に貢獻できるような一つの試みとなるべきであった。六年前にすでに出版された胡適の『嘗試集』を「內容粗末、技巧幼稚」と批判する朱湘の「評『嘗試集』」を創刊號に發表することは、タイミングとして一見唐突なことではあるが、中國最初の白話詩集、「民衆化」新詩の根源に對する省察は、彼らにとって重要な意味があったのだ。「完璧な形式は完璧な精神の唯一の表現である」と彼らの主張を代辯する「詩刊弁言」において徐志摩はこのように宣言するのである――「我々の新文藝には、ちょうど我々の民族本體のように、一つの偉大で美しい將來があると、我々は信じている。」

『晨報・詩鐫』活動を理論的に裏付ける聞一多の格律詩理論「詩的格律」は、『晨報・詩鐫』の第七號に發表されているものの、新詩のリズムや形式に對する彼の思考は、早くも清華時代にまで遡る。清華文學社成立後のまもない二一年一二月二日に、聞一多は讀書報告會で「A Study of Rhythm in Poetry」と題したレポートを發表し、押韻しない新詩やアメリカの自由詩を批判し、二二年三月に前述した「律詩底研究」を書き上げ、律詩こそ「純粹な中國藝術の代表」であると分析する。「詩的格律」における格律の不可缺を說明するために用いた論證のほとんどは、「律詩底研究」において律詩が抒情詩の原理に最も合致した中國の藝術形式だと立證する時に用いた根據と同じであり、「律詩底研究」が「詩的格律」の基礎論であると、楠原俊代氏が指摘しているように[36]、新格律詩の最初の構想は清華學校というアメリカ留學豫備校で生まれたのである。

清華時代に生まれた格律という着想は『詩鐫』において初めて現實の實驗となった。散漫で歐化に走り、中國本來の藝術的特徵を失った新詩に格律を取り入れることは、聞一多らにとって、近代國家としての中國を代表できる、中國詩自體に卽した白話新詩形を試行することだった。「國家主義」、「中華文化的國家主義」と「藝術のための藝術」の主張は、「新格律詩」において一體化されようとしていたのである。

六、『晨報・詩鐫』の分裂――朱湘の離脫

「愛國」と「文藝」は果たして矛盾なく相容れるのか。聞一多は「文藝與愛國」のなかで梁實秋の「風と琴」にも似た詩人像を語っている。

> 詩人は一枚の蓄音機の音盤であるべきである、鐵針がそれに觸ると直ちに響くような。

生涯に幾度も政治活動に卷きこまれていく聞一多はまさに「音盤」のような詩人だ。そして微かな刺激にも極端に强く反應する人物が、『詩鐫』グループにはもう一人いた。聞一多、徐志摩に次ぐ有力詩人の朱湘である。彼の强烈な反抗性は、「三一八」事件とともに出發した『詩鐫』に早くも分裂な危機をもたらす。四月二二日の第四號に、彼は「聞君一多所作詩的功錯」と題する一文を收めた自分の本『新詩評』がまもなく出版されるという內容の「朱湘啓示」を載せ、『詩鐫』から姿を消した。離脫理由をめぐっては二說があり、一つは創作や學問において謹嚴とは言い難く、奔放な氣質の持ち主である徐志摩に對する不滿というもの、もう一つは『詩鐫』第三號で、彼の詩「採蓮曲」が聞一多「死水」と饒孟侃「擣衣曲」の次に置かれたことで、編集者聞一多との間にもつれが生じたことである。その五日後、梁實秋宛ての手紙の中で聞一多はこの離脫劇に觸れ、「この先生は確かに精神病があり、我々はみな彼を狂犬のように見ている[37]」と、怒りがおさまらない樣子をみせている。この手紙と「朱湘啓示」を合わせてみれ

ば、恐らく後者の方がより直接な原因だと考えられよう。

聞一多の怒りは手紙だけに止まらなかった。五月二七日第九號の『詩鐫』に彼は「詩人的横蠻」を發表し、名指しではないものの、朱湘を次のように批判する。

> 孔子が小子に敎え、伯魚に敎える言葉は、孔子のすべての敎訓のように、この時代ではみなタブーを犯すことになる。孔子の見解によれば、詩の魂とは「溫柔敦厚」でなければならない。しかし、今の時代では、この四文字は決して言ってはならず、言い出したら、それは弱者であることを證明することになる。弱者になるのは極めて情けないことである。特にこのような横暴な時代においては。この時代では、詩人さえ横暴に變わり、詩を作るのはやや上品な方法で横暴を施す技倆に過ぎないのだ。

續いて、聞一多は皮肉たっぷりに、詩人らにピンクのユニフォームを配り、軍人のような、特別な身分と、公園、劇場、電車での自由な出入りを許可しようと、政府に提案するが、「しかし、こうなると、中國詩人の從來の『溫柔敦厚』氣風は恐らく永遠に絶滅する恐れがあるだろう」と述べ、「天才」と自認し、友人、編集者、讀者に對してほしいままな態度を振るまわった朱湘を容赦なく批判した。

「横暴」詩人朱湘のことは後に觸れるが、まず聞一多の言う「溫柔敦厚」に注目したい。「溫柔敦厚」はもともと『禮記』に見える孔子の言葉であり、清初にはこの語が望ましい理想の詩の條件の一つとして詩人たちに多用された。[38] 例えば、清の沈德潛は「格調說」を講じ、詩の風格と音調の典雅を貴ぶ一方、「溫柔敦厚」をキャッチフレーズに、「詩は必ず性情に原本し、人倫の日用及び古今成敗興壞の故に關するは、方に爲に存す可し」[39]と述べ、詩における道德、政治的な効用性を主張することにより、漢代儒家傳統詩觀の復活を圖った。このような流れを持つ「溫柔敦厚」は、聞一多の言うように、儒家思想を全面打倒しようとした當時にはタブーだった。しかし、詩作の態度は「溫柔敦厚」であるべきだと、聞一多は早くも二二年の『冬夜草兒評論』において、兪平伯『冬夜』の粗雜な言葉使いを批判する時に强調したことがある。[40] 興味深いことに、聞一多は兪平伯の「民衆化」藝術、「人を感動させ善に導く」詩論を批判しながら「溫柔敦厚」の詩風を提唱している。彼にとって、「溫柔敦厚」は道德、政治効用より、典雅な音調と言葉遣い、柔和で篤實な態度を意味していると、指摘できよう。これも調和したリズム、整然とした形式を求める彼らの新格律詩が目指す境地であろう。

さて、朱湘にもどるが、彼は一九一九年清華中等科四年に入學し、二二年から『小說月報』に詩作や譯詩を發表し始め、聞一多留米後の二三年に清華文學社に參加、二五年に二〇歲の若さで處女詩集『夏天』を出版した天才肌の詩人である。彼は留學中の聞一多と時々書信をやり取りし、聞の初の詩集『紅燭』出版後、詩評『『紅燭』』を書き聞一多を高く評價した。朱湘は敏感で孤獨な性格の持ち主だった。その性格について、後輩で親友である羅念生は「ひねくれていて、傲慢强情で荒々しい。表面は氷のように冷たいが、內心は火のように燃えている」[41]と語っている。清華在學中、彼は朝食の時に食堂で點呼を行う制度に抵抗し、興味の持てない必修課程に出席しなかったために、卒業の半年前に除籍されてしまったのだ。後に一度復學が許され、二七年にアメリカに渡るが、敏感な彼はアメリカの大學の敎師と學生の人種偏見に强く反發し、結局三つの大學を轉々として、二九年に學位を得ぬまま歸國した。その後安慶大學の敎授となるが、學校側との間

に衝突をおこし、憤然と辭職してしまう。失意の末、ついに三三年に二九歳の若さで長江に身を投げて自殺した。

人間としては「溫柔敦厚」と程遠い朱湘だが、聞一多の新格律詩理論の忠實な實驗者であった。楚辭體、民謠などから詞曲までを含む中國古典や、西洋詩、特に古典英詩に學び、新詩に様々な格律の形式を取り入れた。二七年に出版された新格律詩集『草莽集』は代表的な詩集で、靜寂と調和に滿ちた東方的な情緒を美しいリズムで歌っているのが特徴である。「小舟や　ひらひらと漂い／柳や　風のなかに搖れ亂れる／蓮の葉や　綠を廣げ／蓮の花や　人のように艷めかしい／日が沈み／波が微かに搖れる／金色の光がきらきらと川を渡る／左へ行き／右へ進む／蓮採り舟からは歌聲が舞い上がる」。これは新詩の格律を最も精力的に實驗し、また彼を『詩鐫』と訣別させるきっかけにもなった「採蓮曲」の一節であり、その典雅な言葉、調和なリズムは「新格律詩」の一つの模範ともなっている。

「横暴」な性格と典雅な詩風、いわゆる「文は人なり」という言葉とは正反對にして、彼ほど矛盾を抱え込んでいた文學者は少ないだろう。[42] 從來、朱湘の詩は時代性の稀薄な「藝術至上主義」と評價されているが、親友羅念生は八三年の記念文の中で、「祖國を愛し、輝かしい五千年の文化を歌」い、人種差別に反發する朱湘の詩歌理論の出發點が「愛國主義思想」にあったと指摘している。[43] たしかに朱湘は聞一多の「東方文化」、「中華文化的國家主義」といった主張に強く影響されていた。中國的情緒が溢れる格律詩集『草莽集』は一つの證左である。彼における「横暴」と「典雅」の衝突は、「鐵針がそれに觸ると直ちに響く」レコード盤のような愛國感情と「溫柔敦厚」の詩風を提唱する、卽ち「愛國」と「文藝」を一體化させようとする聞一多の主張に一つの限界があることを示唆したといえよう。沈從文はこのように朱湘の詩を批評する。

愛、流血、これらはみな衝突せず、みなその名の下に調和と美が見られる。ゆえに、作者の詩は、この同時代から分離しようとし、獨立して存在しようとしているのである。[44]

希望、不安、動亂が交じり合う現實の中國に生きながら、「溫柔敦厚」の風格をもつ理想の中國を歌うのは、いつまでも續くことが難しいだろう。

二七年、聞一多は中國の五千年の文化を次のように歌い上げている。

あなたの深遠なる神祕、あなたの麗しい虛言
あなたの强情な問いかけ、あなたの金色の光
一つの小さな親密な意味、一つの炎
縹渺とした微かな呼び聲、あなたは何？
僕は疑わない、この因緣が假にもうそではないことを
僕は知っている、海が波のしぶきを騙さぬことを
リズムであるなら、歌を怨むべきではない
おお、横暴な精神よ、おまえは私を征服した
おまえは私を征服した！絢爛たる虹よ
五千年もの長きにわたる記憶よ、動かないでおくれ
いま私は、おまえをしっかり抱きしめる術を知りたい……
おまえはかくも横暴で、かくも麗しい[46]

——「ひとつの觀念」

中國人として中國を愛さねばならないが、神祕で虛言のように美しい五千年の記憶は、どのようにして固く抱きしめることができるのか。清華からアメリカ留學を經て、『詩鐫』の誕生に至るまで抱きつ

づけてきた、理想の中國を愛するという「一つの觀念」に對して、現實の中國を見つめ始めた聞一多は迷いながらそう問い掛けている。

一九二六年六月、聞一多を始め、多くのメンバー達が北京を離れて、『詩鐫』は僅か二ケ月あまりの命でその終わりを告げた。

七、終りに

一九二〇年と二一年に、胡適の白話詩集『嘗試集』と郭沫若の『女神』が相繼いで出版されることにより、新詩は「民衆化」と「歐化」の一途を辿っていく。この勢いにブレーキをかけ、新詩の民族化、本土化、藝術化を目指した新格律詩運動は、アメリカ留學豫備校「清華學校」という西洋に最も近いキャンパスに芽生えたのである。その最初の構想から本格的な實驗までの歩みは、聞一多を中心とした清華園詩人らの國學、中國文化への關心、國家主義活動の展開と軌を一にしている。愛國の思いと純粋な藝術としての文學、その間で揺れながら共存を求めていたのである。聞一多、梁實秋らのタゴールに對する批判は、その屈折した心を映したものだと言えよう。

注

(1) 芦田肇「鄭振鐸とタゴール文學――文學研究會結成前後における文學意識の一面――」(『東洋文化研究所紀要』第一〇三册、一九八七)は詳しく論じている。

(2) 徐志摩「太戈尔來華」、『小說月報・太戈尔專號』、一九二三年九月。

(3)(4) 郭沫若「太戈尔來華的我見」、『創造週報』第二三號、一九二三年十月一四日。

(5) 「大江學會」は一九二三年九月に行われた清華同窓會の中部集會において成立されたもので、二四年夏の「大江會」の前身である。

(6) この點について陸耀東「聞一多的詩與其文化心態」(『中國現代文學研究叢刊』一九八八年第四期)、渡邊新一「『三一八』と聞一多」(『商學論纂』(中央大學)第三三卷第六號、一九九二年八月)はすでに指摘している。近年、唐鴻棣『詩人聞一多的世界』(學林出版社、一九九六)は聞一多の文學觀における「唯美―愛國」を、矛盾としてではなく、「一種複合的文學本體觀」として捉えている。

(7) 梁實秋「談聞一多」(『雅舍懷舊―憶故知』、中國友誼出版公司、一九八六)。

(8) 楠原俊代「アメリカ留學生の肖像――大江會同人をめぐって――」、竹内實編『轉形期の中國』、京都大學人文科學研究所、一九八八。

(9) 一九二六年一月八日の『清華週刊』は「金人氏」と署名した「國家主義的論辯」の記事が載せられている。三民主義、共產主義、國家主義が清華校内で激しい辯論を繰り廣げた様子を傳えている。また、『清華週刊』から羅隆基の清華における國家主義講演についての賛否兩論の記事も多く見られる。

(10) イリノイ大學學長 Edmund Janes James のルーズベルト宛の覺え書。ただし、原文未見、清華大學校史編寫組『清華大學校史稿』(中華書局、一九八一)からの孫引き。

(11) Arthur Smith 中國名は明恩傳。西洋人の中國、中國人觀を大きく影響した著書 *Chinese Characteristics* (New York : Revell, 一八九四)などをもって名が知られている。彼のルーズベルトへの影響については、蘇雲峰「清華學校――美國早期『和平演變』中國的重要孔道」(『中央研究院近代史研究所集刊』第二一期、一九九二)を參考にした。

(12) 蘇雲峰氏の前掲論文には詳しい論述がある。例えば、清華の歴代學長や代理學長の中に、唐國安、周詒春、趙國材、嚴鶴齡、曹雲祥などは聖ジョーンズ大學卒、或いは同學での教育指導經驗があった。一九

一六年までの清華文科系中國人教員一六人の中に、聖ジョーンズ大學出身者は一二人がいた。

(13) 同上論文。

(14) 『中國キリスト史研究』(一九七二、東京大學出版社)。尾崎文昭「陳獨秀と別れるに至った周作人――一九二二年非基督教運動の中での衝突を中心に」(『日本中國學會報』一九八三)もこの點について觸れている。

(15) 「大江會宣言」は、中國の教育狀況を「無教育」、「暗黑教育」、「西洋化教育」の三つの種類に分け、「無教育」より毒害が大きいのは「暗黑教育」であり、「暗黑教育」よりも毒害が大きいのは「西洋化教育」であると述べている。

(16) 李惟果「清華的國學問題」、『清華週刊・十周年記念增刊』(附第三〇三期、一九二四年六月)。

(17)(18) 蘇雲峰「清華的人文教育傳統」(『中央研究院近代史研究所集刊』第二〇期、一九九一)。

(19) 清華大學校史編寫組による、清華學校國語教師汪汎庵へのインタビュー、前掲『清華大學校史稿』。

(20) 『清華大學校史稿』によると、清華教師の給料は、アメリカ人が一番高く、「西學部」の中國人教師の二倍、「國學部」教師の三～五倍であった。住宅條件に關しても、「國學部」教師は待遇が一番惡く、舊い「古月堂」に住んでいた。

(21) 潘光旦「清華初期的學生生活」、『文史資料選輯』三一卷、一九六二年十月。

(22) 一九一四～二四年、『清華週刊』が取り上げた十大問題：「改組董事會問題」、「教育方針及改辦大學問題」、「國學改革問題」、「男女同校問題」、「招生問題」、「考察國情問題」、「職業指導問題」、「回國同學联絡問題」、「德育問題」、「課程問題」。

(23) 『聞一多全集』(湖北人民出版社、一九九三)。以下の聞一多の文章の引用はすべてこの全集に從う。

(24) 楠原俊代「聞一多の『律詩底研究』について」(『日本中國學會報』一九八六)を參照。

(25) 鄭大華『梁漱溟與胡適――文化保守主義與西化思潮的比較』(中華書局、一九九四年。)

(26) 梁實秋「送一多遊美」序(『清華週刊第八次增刊』一九二二年六月)、原文の引用は『聞一多年譜長編』(湖北人民出版社、一九九四)から。

(27)(28) 原文の引用は上掲『年譜』から。

(29) 梁實秋『草兒』評論」原文未見のため、商金林『聞一多研究述評』(天津教育出版社、一九九〇)を參照した。

(30) 様々な反響や文學研究會側からの批判に關して、商金林氏の前掲書は詳しい記述がある。

(31) 聞一多「致聞家駿聞家駟轉父母親信」一九二二年一二月二七日。

(32) 羅念生「給子沅」、『晨報・詩與批評』附刊第一六號、一九三四年三月二日。

(33) 一九二五年一月、聞一多、余上沅、梁實秋、梁思成、林徽因などを中心にニューヨークで「中華文化的國家主義」をスローガンとして揚げる「中華戲劇改進社」が結成された。三月、聞一多は梁實秋宛ての手紙の中で出版物を出す計畫を傳え、「表彰印度之愛國女詩人奈陀夫人」と語っている。その計畫と雜誌名「河圖」について、朱湘の「爲聞一多詩『淚雨』附識」(『京報副刊』一〇七號、一九二五年四月二日)においても明かにされている。

(34) 二五年前後の北京には「大江會」以外に、他の國家主義團體は「醒獅社」「中國國家主義青年團」などが數多くあった。李璜などの發起によってはそれらの各團體が連合され「北京國家主義各團體連合會」が組織された。前掲『年譜』を參照。

は聞一多の作詩意圖とはかけ離れた譚氏自身の感想にすぎない。

(35) 李璜『學鈍室回憶錄』(臺灣傳記文學出版社、一九七八)。
(36) 楠原俊代氏の前掲論文。
(37) 梁實秋宛ての書信、「談聞一多」に見られる。
(38) 吉原英夫「王漁洋と沈德潛」(伊藤虎丸、横山伊瀨雄編『中國の文學論』汲古書院、一九八七)。
(39) 沈德潛『國朝詩別裁集』凡例」。吉原英夫氏の解釋によれば、沈德潛の詩に對する態度は、「詩には道德・政治にかかわる褒貶の意が寓せられていなければならず、詩は天下の風教に役立つのでなければならないというもの」であったとされている(前掲文)。
(40) 『冬夜草兒評論』において聞一多は次のように言っている。
戴叔倫講：「詩人之詞，如藍田暖玉，良玉昇煙．」作詩該當怎樣雍容衝雅，「温柔敦厚」！我真不知道俞君怎麼相信這種叫囂粗俗之氣便可入詩—難道這就是所謂「民衆化」者嗎々
(41) 羅念生「憶詩人朱湘」、『新文學史料』、一九八二年第三期。
(42) 朱湘の「文非其人」は早い時期から指摘されている。沈從文「論朱湘的詩」(『文藝月刊』第二卷第一期、一九三一年一月三〇日)は次のように彼を評している。「作者在生活一方面、所顯出的焦躁、是中國詩人中所没有的焦躁、然而由詩歌認識道人、却平静到使人喫驚。」後の研究者もしばしばこの點を指摘しているが、彼における矛盾をどのような形で捉えるべきかは殆ど言及されていない。
(43) 羅念生「朱湘的詩論」、『二羅一柳憶朱湘』、三聯書店、一九八五。
(44) 沈從文前掲文。
(45) 翻譯に際しては「タゴールの中國現代詩への影響」(譚中著、森本達雄譯、『タゴール著作集・別卷タゴール研究』第三文明社)の中にある本詩の翻譯を參考にした。しかし、譚氏は本詩を收めた『新月詩選』(一九三一、新月書店)をタゴール詩集『新月』の中國版とし、本詩が「タゴールと聞一多のいわば對話」のように思えると述べている。これ